



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

つかなない事態に至った人もいました。

火事による死亡について書くのは長い連載でこれが初めてのことです。マサカリ投法でも知られる。昭和の野球史に残る大投手、村田兆治さんが11月11日に亡くなりました。享年72。

同日午前3時10分頃、東京都世田谷区の自宅が出火。村田さんは意識不明の重体で救急搬送されましたが、そのままお亡くなりになりました。

村田さんはこの家に一人で住んでいた様子で、火元とみられるリビングとは別の小部屋で座ったままの状態で見送られたといいますが、死因は、火事による一酸化炭素中毒との発表です。

在宅医として、独居の高齢者を何人も診ています。介護保険を利用しながら、悠々自適に楽しく暮らしている人が大半ですが、やはり一番の心配事は火の元です。ちよっとした不注意で、取り返し

281 元プロ野球投手 村田兆治



村田さんの自宅の出火原因はまだ不明なのですが、冬場に気を付けたいのは、やはりストーブによる出火です。特に高齢男性の一人暮らしの場合、

合は、部屋を片付けるのが苦手な人が多く、ストーブの近くに雑誌や新聞が重なっていたり、ともすれば飲みかけのアルコールが転がっていることも。往診に行くたびに「ストーブのそばに物を置くのはあかんぞ」と周辺を片付けてあげますが、次に伺ったときは見事に元の状態に戻っています。

せめて石油ストーブはやめてオイルヒーターやエアコンに変えませんかとアドバイスしても、「ワシはこれが好きなんや」と石油ストーブにこだわる人も。上にやかん

を置いて熱燗(あつかん)を作ったり、オイルに包んだ筆を焼く楽しみを、そんなおじいちゃんから奪うのも忍びないなあと感じます。あるいは、天ぷらを揚げていて、コンロの火が衣服に移って大やけどをした患者さんも何人かいました。仏壇のろうそくの火を消し忘れてボヤを起した人もいました。タバコの不始末から家が全焼した人も知っています。

火災による死亡者は年々減少していますが、それでも、1日あたり約65歳以上の高齢者が70%を占めており、男性の方が死者が多いことがわかっています(令和2年版 消防白書)。

村田さんは今年9月に、羽田空港の保安検査場で女性検査員に暴力を振るった容疑で現行犯逮捕されたばかりで、往年のファンにとっては、悲しくやりきれない最期かもしれません。

しかし、それで過去の栄光が否定されるものではない。村田さんの野球への情熱と功績は永遠に輝き続けよう。

永遠に輝く野球への情熱と功績